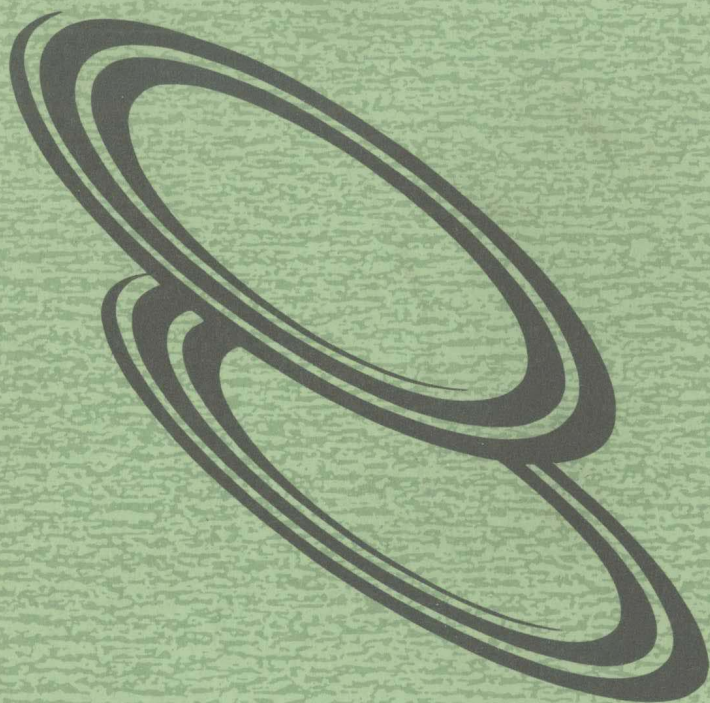


教育・経済・社会

放送大学客員教授
東京大学教授

放送大学助教授

金子元久 ● 小林雅之



放送大学教材
2475-1-9611

'96

文部省認可通信教育

著者紹介



1
・4
・7
・11
・15
●かねこ・もとひさ
●金子元久

1950年 東京に生まれる
1972年 東京大学教育学部卒業
1974年 東京大学大学院教育学研究科修士課程修了
1984年 シカゴ大学大学院修了 (Ph.D)
アジア経済研究所員, ニューヨーク州立大学客員助教授, 広島大学
助教授をへて
現在 東京大学教授
専攻 教育経済学, 高等教育論
主な著書 『アジアのマンパワーと経済成長』(編著 アジア経済出版会)
『From Higher Education to Work』(共著 OECD)
『近未来の大学像』(共著 玉川大学出版会)



1
・3
・8
・10
●こばやし・まさゆき
●小林雅之

1953年 静岡に生まれる
1976年 東京大学教育学部卒業
1982年 東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得済み退学, 広島修道
大学講師, 助教授をへて
現在 放送大学助教授
専攻 教育社会学
主な論文 日本における教育経済学の展開 (『放送大学研究年報』第12号)
女子高等教育卒労働市場の構造変動分析 (『放送大学研究年報』
第11号)
男子大卒労働市場の構造変動分析 (『修大論集』第33巻1号)
1970年代の教育計画, 日本型労働市場と教育計画 (『生涯学習化社
会の教育計画』教育開発研究所)
中教審答申以降の高等教育計画の展開 (『修大論集』第29巻1号)

放送大学教材 82475-1-9611

教育・経済・社会

発行——1996年3月20日 第1刷
1998年2月20日 第2刷

著者——金子元久・小林雅之

印刷・製本—大蔵省印刷局

発行所 財団法人 放送大学教育振興会
〒105-0001
東京都港区虎ノ門1-14-1
郵政互助会琴平ビル
電話・東京 (03) 3502-2750

市販用は放送大学教材と同じ内容です。定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はお取り替えます。

Printed in Japan

ISBN4-595-82475-0 C1311

教育・経済・社会

金子元久



小林雅之

教育、そして社会、そして経済。この3つの言葉を並べてみると、教育から社会へ、そして経済へ、と段々に距離が開いてくるようにみえる。教育はそもそも人間そのものの形成に関わるものであり、それ自体が目的になるべきものであるとすれば、それが社会、ましてや経済に関係ができてしまうのは、むしろ現代社会の教育の墮落にすぎない。こうした3つの概念を並べること自体が、教育の冒涇だし、あるいは現代の教育の問題を生じさせる発想につながる——そうした声も聞こえてきそうだ。

本書、および放送大学の放送科目『教育・経済・社会』において我々が主張したかったのは、むしろ逆に、こうした3つの概念を結びつけたところに、現代日本の教育の重要な問題を見通すカギがあるのではないか、ということである。教育がそれ自体の価値をもつとしても、教育は社会に大きな影響を与えずにはおかないし、逆に社会を背景としなければ教育はなりたたない。そして現代において、教育と社会との間の、ますます重要な媒介となりつつあるのが、経済的な諸要因である。現代日本の教育は、こうした関係をいわば呑みこんで成立しているのであり、その可能性も矛盾もそれをヌキにしてはあり得ない。そう考えることによって、受験競争や、さまざまな教育問題、そしてその背後にあるもっと重要な問題が立体的にみえてくるし、さらにそうした状況から前進

するヒントもみつけることができるのではないだろうか。

こうした考え方の背後には、「教育社会学」あるいは「教育経済学」といった教育学の研究分野での蓄積と歴史がある。しかし我々は、そうした学問分野における既成の枠組みや理論そのものを紹介するのではなく、それを現代的な関心からあらためて整理し直し、しかもなるべくわかりやすく述べるように努力しようとした。その成否は読者に判断していただくしかないが、それは我々自身にとっても模索の過程であり、そのためにさまざまな方々のご協力を得なければならなかったし、ご迷惑をおかけした。とくに放送番組制作にわたっては土屋二彦氏（放送教育開発センター）および田村玲子さん（NHKエデュケーショナル）のお2人、本書の出版については宮崎和夫氏（放送大学教育振興会出版部）は、そうした試行錯誤に辛抱強くつきあい、また貴重な助言を与えてくださった。あつくお礼申し上げる次第である。

1996年2月

金子元久・小林雅之

目 次

まえがき	3
------	---

金子元久・小林雅之

1——教育と経済を見る目	9
--------------	---

金子元久・小林雅之

教育と社会	9
視点としての「経済」	14
本書の構成	17
コラム／視野の拡大と複眼的思考のために	12
コラム／学習の進め方	18

5

2——教育と社会・経済発展（1）	21
------------------	----

—教育と社会発展の歴史 小林雅之

教育システムと社会システムの階層構造モデル	22
初中等教育と高等教育の発展	26
教育の社会的役割	29
現代教育システムの課題	31
コラム／モデルの効用	21

目
次

3——教育と社会・経済発展（2）	33
------------------	----

—近代日本の教育と社会 小林雅之

近代以前の日本の教育と社会	33
明治の教育改革	34
社会的選抜と教育的選抜の結合	37
学歴社会の成立	38
学校教育の拡大	40
戦後の教育への遺産	41
コラム／機会費用	36

4 — 教育と社会・経済発展 (3)	43
— 世界の教育と社会	金子元久
経済発展水準と教育	43
途上国の教育問題	48
初等教育の普遍化	50
コラム／「粗就学率」, 「純就学率」, 「修了率」	47
5 — 経済現象としての教育 (1)	55
— 個人的投資としての教育	金子元久
人はなぜ学校へ行くのか	55
費用と利益	57
教育投資の「収益率」	59
コラム／「人的資本」の理論	63
6 — 経済現象としての教育 (2)	65
— 社会的投資としての教育	金子元久
教育における社会的な選択	66
マンパワー理論	67
社会的収益率	69
個人的選択と社会的選択	73
7 — 経済現象としての教育 (3)	75
— 教育と「市場」メカニズム	金子元久
教育機会の市場	75
労働市場	79
2つの市場の相互関係と均衡	81
8 — しごとと教育 (1)	85
— 産業・職業の変動と教育	小林雅之
教育と職業の関連	86
選抜理論とは何か	89
アメリカにおけるマンパワー政策の展開	94
コラム／理論・仮説について	90

9——しごとと教育 (2)	97
—学歴と就職	小林雅之
学校教育と職業の密接な関係への疑い	97
職業と教育の関連を説明する理論	99
葛藤理論と職業競争モデル	104
日本の労働市場の特徴と教育	108
10——しごとと教育 (3)	111
—女性の職業と教育	小林雅之
伝統的な女子労働	111
女性の社会参加の拡大	113
女子の労働と進学の変化の背景	117
女子労働の問題	120
生涯学習の役割	123
コラム／働く女性の呼び方	123
11——教育問題の政治経済学 (1)	125
—戦後日本の教育	金子元久
量的拡大の軌跡	125
なぜ教育拡大が起こったか	129
拡大の帰結	134
12——教育問題の政治経済学 (2)	139
—教育政策の動向	金子元久
戦後体制から高度成長へ	139
福祉国家化	145
「55年体制」の崩壊と教育	149
13——教育問題の政治経済学 (3)	153
—教育における政府の役割	金子元久
教育と政府—その近代的特質	153
福祉国家の限界と新自由主義	156
政府の役割の再検討	158

14——教育問題の政治経済学（4）	163
—教育改革の動向	金子元久

高校教育—多様化	163
大学教育—規制緩和・評価・効率化	168
これからの問題—義務教育および生涯教育	174
コラム／「大学評価」と「アクレディテーション」	171

15——現代社会の教育的課題	177
	金子元久

教育と社会—基本的な問題と日本の特質	177
「教育問題」の構図	180
呪縛を解き放つもの	183

索引	191
----	-----

教育と経済を見る目

この章のねらい

教育と社会との間の関係を、特に経済という視点からみれば、何が浮びあがってくるのか、それを問うことによって、現代教育の問題をさらに深く考える契機をつかまえることができないだろうか。これが本書全体を通じての我々の基本的なテーマである。

この章ではまず、そうした作業の背景となる、教育と社会との関係についての基本的な考え、そしてこの問題にアプローチするための戦略あるいは考え方の枠組みといったものを示し、それが本書全体の構成とどう関わっているかを述べる。

教育と社会

本書における議論の出発点は、現代における教育が、それをとりまく社会と、不可分な関係をもっている、という事実である。

●教育と社会、社会と教育

「教育」を定義するとすれば、それは「人間の発達をめざした意図的な働きかけ」、とひとまずいうことができよう。

人間とその知性、あるいはその発達がそれ自体、きわめて重要な価値であることはいうまでもない。そうだとすれば、教育というものの価値じたいは、それだけで明らかなのではないか、という人もいるだろう。実際、歴史上の教育学者は、価値そのものとしての人間とその知性、そ

してその人間になるということの意味、を中心としてさまざまな形で探求を行ってきたのだった。我々は、そうした探求の意味を疑うものではない。

しかし、ここで少し立ち入ってみれば、人間とその知性、そして子どもがそうした人間になっていく過程というものは、およそ社会とは切り離しては考えられないことがわかる。

人間の知性というものは、1人1人の人間の中にあるものである一方で、社会との関係との間で意味をもちうるのだし、また、社会の中で蓄積されてきた文化によってその土台を築かれている。また、現代社会では子どもが成長していく過程も、親や家族、近隣社会、そして学校といった社会的な環境の中でしかあり得ない。とくに教育を最も組織的に行うためにできた「学校」という組織は、社会の媒介なしには成立しないし、維持できない。

他方で、現代の社会が、教育という機能なしになりたないのも明らかだろう。

現代の日本の社会のさまざまな活動は、社会の成員が同じコトバをしやべり、同じ文字を読み書きし、同じ文化的背景をもっていることよってなりたっている。

また、学校や企業で行われる教育なくしては、モノやサービスの生産もなりたないだろう。教育は社会の効率的な活動の基盤となっている。そして何よりも大切なのは、人間がこの社会の中で、人と共同しつつ、自分自身の個性をよりよく発揮して生きていくこと、いい換えれば、社会の存在する目的を実現するためにも教育は不可欠の手段だ、ということである。

こうして教育にとって社会が、あるいは社会にとって教育が、それぞれ不可欠の存在となっているのである。

●社会の中の教育、教育の中の社会

こうした密接な関係は、現代においては、教育あるいは社会の問題をそれぞれ独立に考えることが難しくなっていることを意味している。

たとえば、社会における平等とか機会均等を問題にするとき、我々はやはり教育の機会がどう平等・均等であるかを問題にせざるを得ない。あるいは、社会が急激な社会変化をなしとげなければならないとき、社会はまず教育を変えることをもって、そうした課題に立ち向かおうとする。社会の問題そのものなりたちにも、それを解決するための社会の努力にも、教育は深く食い込んでいるのである。

他方で、教育の中にも社会は深く食い込んでいる。たとえば、いわゆる「受験体制」の問題を考えてみよう。大学の入学試験は、まさしく大学に入学する者を選抜するために、大学という学校によって行われる。そしてそれが高校や中学校・小学校の教育にも影響を与える、そういう意味で、受験体制とは学校の問題であり、いわゆる「教育」問題であるに違いない。

しかし他方でそれは、特定の大学に入学したい、という本人あるいは父母の要求、そしてそれに影響をおよぼす社会の状況によって規定されていることも重要な事実である。あるいは、学校教育の内容を考えてみよう。学校で教えられる知識も、それ自体の知識としての論理をもっているとしても、やはり社会で生きていくときにどのような知識が必要とされているか、という問題とは切り放して考えることができない。

いい換えれば、我々が現在みている教育そして学校は、そうした社会との関係をいわば「呑み込んだ」それなのであって、それを無視して現代の教育と学校の問題を語ることはできないのである（12～13頁の「コラム／視野の拡大と複眼的思考のために」参照）。

視野の拡大と複眼的思考のために

教育は誰でも経験することである。教育を受けなかった人はいない。しかし、それだけに客観的にみることがきわめて難しい。いい換えれば、自己の経験にとらわれないことが難しいのである。

視野の拡大と深化

それでは、こうした客観的なもののみかたの確立はどのようにして達成されるだろうか。さまざまな方法がある。そのいくつかをあげてみよう。

●視野の転換…第1は、視野を拡大するためには、ミクロ・マクロにみるということである。レンズをひいたり近づけたりして対象を見るといってもいい。日本の教育全体のことを考えるときに、自分の経験と照らしあわせてみる。これは意識的かどうかはともかく比較的誰でも行っていることである。逆に、自分の経験がどの程度一般的なものか考えてみるために、日本全体ではどのようなになっているか、あるいは世界全体ではどうかということを見るのである。このようにして視野を転換することができるようになるだろう。

●比較…ミクロ・マクロにみることは比較するということも意味する。私たちは比較によって、自己の経験を振り返ってみることができる。まさに「人の振りみてわが身を直せ」なのである。誰でも見知らぬ土地に行き、自分とまったく違う生活をみたときに、自分の生活と比較を行っている。いわゆるカルチャーショックもこのことを指している。

比較には時間的比較と空間的比較がある。今見知らぬ土地の例えでみたのは、空間的比較である。これに対して、時間的比較は歴史の比較である。たとえば、明治時代の教育と比較することで、今の私たちの教育をよりよく理解することができる。これを学問の立場から見ると、時間的比較は歴史研究であり、空間的比較は、地域研究・国際比較研究ということになる。

それゆえ、こうした比較研究はただ単に歴史や諸外国のことを知ろうとするだけではない。それらと比べて現在の私たちの教育を理解すること、さらに自分の教育経験を理解することが目的なのである。それがなければ、単なる「物知り」や「雑学」に過ぎないといってもいい。

●教育と社会の関連…こうした視点から強調したいことは、自分の経験を理解するために、自分の中をみるのではなく、外をみるということである。いい換えれば、自己を外部との関連でとらえることである。「社会の中に自己をみる」ことは「自己の中に社会をみる」ことでもある。

これは社会化（socialization）と呼ばれる人間の発達と社会との関わりの過程をみていくとわかりやすい。この詳しい説明は放送教材及び第2章に委ねるが、人間が役割を取得して成長し、社会の中に入っていく過程は、人間の中に役割という形で社会が浸透してくる過程でもある。したがって、自分がどのような人間であるかを理解するには、その自分の外部の社会を理解する必要がある。いささか大げさにいえば、時代を理解することは自

己を了解することなのである。このことを教育に即していえば、「教育の中に社会をみる」ことは、「社会の中に教育をみる」ことであり、教育をみる目を養うことは社会をみる目を養うことでもある。

最後に、視野を確立するためには、正確な知識を身につけることが重要であることを強調したい。教育は誰にでも体験できるだけに、改めて正確な知識を求めようとするより、生半可な知識で済ませてしまう場合が多い。日常生活ではそれでも通用する場合が多いが、これでは客観的な把握は難しい。

複眼的思考

視野の確立の重要性は理解できたとしても、これだけでは具体的にどうしたらいいのか、まだよくわからないという人も多いであろう。それではどうしたらいいか。現象を理解し把握する、現象に迫る方法をアプローチという。現象にアプローチするためには、それなりの道具が必要である。ミクロの世界では、顕微鏡、マクロの世界では、望遠鏡がいるように。この講義では、このために次のような3つの「道具」を用意した。第1は先に述べた比較法であり、第2はモデルであり、第3は複数のアプローチである。

●モデル…まずはじめにモデルから説明しよう。モデルは複雑な現象を単純化し理解しやすくするものである。そのためにモデルは現象のある面、要素だけを取り出し、他は無視する。モデルを使うことによって、現象のある面は理解しやすくなる。たとえば、この講義で用いる社会システムの階層構造モデルは、学歴社会や受験戦争を理解するために有効である（第2章21頁のコラム「モデルの効用」参照）。

●複数のアプローチ…モデルは現象の一面だけ強調するのであるから、他の面は無視される。たとえば、上にあげた社会システム・モデルでは政治的要因・経済的要因・文化的要因などはまったく考慮されない。これでは、視野の拡大は難しい。そこで、この講義では、多くのアプローチを用意した。これによって、同じ現象、たとえば人はなぜ大学に進学したいと思うか、に関しても、多くのアプローチによって、別の面からみることができると。この講義ではとりわけ、社会学と経済学のアプローチを用いている点に特徴がある。

一般に、学生は大学教育全体でさまざまな講義を通じて、こうした複数のアプローチを学習することによって、複眼的思考を身につけることができる。この講義では、1つの講義の中で、多くのアプローチを用意している。多くのアプローチを理解することで、複眼的思考を身につけてほしい。

なお、今日の専門分化した学問研究では、一口に社会学とか経済学とかいっても、その立場やアプローチのしかたはさまざまである。この講義でも、多くの立場やアプローチをとりあげているが、この講義で取り上げるアプローチやモデルもきわめて限られたものに過ぎない。私たちは、この講義では学問研究の入り口とその奥行きが理解できれば十分だと考えている。

視点としての「経済」

ただ本書がめざすのは、社会と教育との関係を全般的に解説することではない（注1）。社会と教育との関係と、そこにあらわれたさまざまな問題点を、さらに「経済」という要因に着目して考えてみる、というのが本書の目的である（注2）。

ただ経済ということばを使うからといって、それは、おカネにかかわることのみを問題にする、というわけではない。むしろ経済に着目することによって、現代の教育が直面する問題に関して、その深さをみきわめ、また将来への展望を広げることができる、というのが我々の考えである。

具体的には、我々が着目するのは、次の3つの点である。

●教育における選択行動と市場メカニズム

まず第1は、社会の中での教育のなりたちも、1つの経済メカニズムとしてみるできないだろうか、そして、そうしてみれば何が発見されるのか、という点である。

たとえば、1人1人の個人が、学校へ行く、という行動も、一方でそれに要する犠牲、他方でそれによって得られるもの、の2つを比較して決定される、と考えれば、それは1つの**選択行動**とみなすことができる。犠牲や利益が必ずしもおカネで表されることを意味するのではないとしても、そうした枠組みで行動を理解しようとするのは、経済学においてとられた考え方であった。同時に、まったくカネの側面のみからみれば、進学に要する費用と、それによる利益はどのような関係にあるのか、という点も現代の教育を考えるうえで重要な点であるに違いない。

また、社会全体からみれば、さまざまな学校の卒業者が、どのように雇用をみつけていくのか、ということを考えると、そこに学卒者の「需要」と「供給」とがどのように相互作用を行うか、という問題がでてく

注1：教育学の中でも、以上のような視点からのアプローチを行ってきた分野に、「教育社会学」がある。章末の参考文献参照。

注2：教育と経済との関係に着目して発展してきたのが、「教育経済学」という研究分野である。ただし本書では、従来の教育経済学よりも少し幅広いアプローチをとっている。教育経済学の理論については、章末の参考文献を参照。

る。また、教育の機会についても進学希望者からなる「需要」と、学校が形成する「供給」との相互作用、という視点もあり得るだろう。そう考えると、その両者において市場メカニズムがどのような機能を果たしているかが、長期的な教育の拡大や構造変化を規定している、と考えることもできる。

行動とそれを巨視的に結びつける市場、という経済学的な視点が第1の着目視点であるとすれば、第2、第3のそれは、現代社会において、教育と社会が具体的に結びつきをもつ、2つの軸に関わっている。

●教育と職業

すなわち第2の視点は、教育と社会とをむすぶ1つの、しかもきわめて重要な軸としての、職業（しごと）である。

一方で、個人は、学校で教育・訓練を与えられることによって、社会的活動が可能となり、さらに具体的な職業に携わるための準備を与えられる。

巨視的にみるならば教育は、社会が必要とする生産活動や社会的なサービスを維持する人材を供給する点で不可欠の役割を果たしている。これはいわば教育の生産的な機能の側面と呼ぶことができる。

しかし同時に、この過程を通じて、個人は社会的な機会を配分されることにも留意しておかねばならない。

具体的には、学校教育の経験によって、どのような社会的地位を獲得できるかが、ある程度決定されてしまう。巨視的にみれば、教育は、社会的な地位や収入の分配を決定する過程となるのである。現代社会において、どのような人にとっても望ましい職業や地位がある限り、こうした教育の機能を否定することはできない。

教育と社会とをむすぶ、しごとという媒介は、こうして生産と分配の2つの側面をもっている。そのいずれもが、社会の経済構造に密接に関